

龍護寺千手觀世音菩薩の御靈驗

— 若い日にその救いは預かった私 —

会員 多田太郎 吉

(青山墨沢 当年七十九才)

時は明治四十三年の旧六月、私は難病に襲われました。そこで佐伯町の有る知人のお宅の一室を借りつけ、医師にかかり療養につとめ、八方手をつくしました。私が十五歳のときのことです。

当時は、今のようには医学の進歩もない時代でありましたから、薬石なかなかな効を奏せず、医師からは見放され、また宿の方からも宿がえを申され、まことに悲惨な状態に陥ってしまいました。

祖母と両親は、やせ細った私の小腕にとりつきながら、今死んだなら一生忘れることばでいきなさい。思い出せば持つておるものもとりおとす。何とか助かるてだてはなないものかと、歎くばかりでありました。

ところが天の助けか、龍護寺の観音様は、ご靈驗あらたかた、医師から見限られた病人でも、ご住職さまが引き受けて下されば、助からないものは一人もないとのこと聞きましました。

そこで早速祖母が龍護寺にお参りして、くわしく子細を申しあげ、お願い申しましたところ、今なら助かるから連れて来るがよいと申しられました。全く暗夜にともしび、地獄でほとけという、ほんとにありがたい、もつたいない思いでありました。

そこで祖母が龍護寺に早速お参りし、ご住職さまからご祈念をいただきましたところ、不思議にも食は進み、起きたようになり、一週間ぶりに祖母に支えられて寺にたどりついたのが、忘れもしない旧十月九日でした。

早速ご住職さまに参籠をお願ひ申しましたところ、快く引き受けて下さいました。海福寺の住職さん(當時は宗吾師)は、馬に乗ってたびたび龍護寺に遊びに来られていました。私を見て

「あれでも観音様のご利益でなれるものであろうか」と申されたそうです。

寺には今は故人となられておりますが、下野田渡越の深矢友太郎さん(当時二十六歳、後青山桐野司農家(養子)と、元中村武蔵市郎治さんの妻ロクさん(当時三十二歳)の二人が参籠しておりました。ロクさんはおがて全快して、おひまをいふだいて帰りました。

私は他に願ひはなく、「今死んで親不孝者になりませう。どうぞ祖母や両親のご恩報じとさせて下さい。」と、一生懸命ご祈念申し上げたのであります。ご住職さまも懸命にご尽力下さり、祖母は付添参籠して、髪を毛まで切って奉納してくれました。

ちやうど稲の取入れの真最中で、父母は昔のことと晩十二時ごろまで仕事をし、やめて父は氏神様へお参りし、母は弟(当時三才)を背負い、ご靈驗あらたかな山崎作市さん方の観音様にお参りし、寢食を忘れて、ただ私を助けようと一生懸命でありました。

誠の心が天(観音様)に通じたのでありましようか、観音様は大慈悲の両手を垂れ給ひ、私に日に日に元気がよくなり、寒中水業までき、二時間もかかるお百度参りもふめるようになりました。

寒中水業は、今日もうおからなくなっています。す

「お寺の近くに観音淵」といふのがあり、朝起きるとその淵に「つかり、しばらくお経をおぼします。寒中のことです。から、水から上った時には手足はしびれて動きにくい程冷たくなり、そのままだしで帰り、凍死のまじりシドガラゲをして、お寺の前の石畳の上を、二時間程歩くのです。また夕方もこの水業をいたしました。

ある晩、父が寺へとまり、翌朝私たちが氷のけた観音淵にとびこみ、水業をはじめぬのを見て、たまらなくなつたのが父も裸になり、私かとめるのもきかず、飛びこんで水業をしてくれました。

またその後、母も寺に泊ったことがあり、翌朝私たちが水業場へ行つたところ、背負っていた弟をおろしかけました。私はあわてて、やつと押し止めたこともありました。

なお、父は朝暗いうちに起きて、薪や食糧などを馬に負ませ、自分もカイルイカゴで寺までいそいで運んできてくれ、家中それは全く辛苦の毎日でありました。

おかげさまで、私は食も驚くほど減り、セマと見違えるように肥えて元氣になり、年の暮にはサシ下駄（高い歯の下駄）ばきで、十八キ口もあるなつかしい我が家へ、久しぶりに帰ることができました。そして一家そろって年越し祝いができ、このようなおりがたい嬉しいことはありませんでした。

それからお礼籠りや、お寺の仕事の手伝いなどしばらくして、三月におひまをいただいて帰りました。もしあのままであつたら、涙の正月であつたであらう。思えば身の毛のよだつ思いがいたします。

これとえに観音様の慈悲のおかげであります。また、ご住職さま、祖母、父母の慈愛のたまもので、また観音様のことを教えて下さった方々のおかげで、このご

恩日忘れがたく、私以来六十五年間、今日に至るまで龍護寺の観音様は月参りをさせていただいております。

私は明治四十三年三月、下堅田尋常高等小学校を卒業しました。校長は岩崎佐一先生で、私日満十四歳でありました。

それから家業に従事していましたが、その年の七月、炎天下の作業中に私はたおれ、医師にいかけて自宅で養生しました。しかし時々大熱を發し、悪化するばかりでありましたので、佐伯所のある知人宅の一室を借り、うけて、前記のように療養生法に入りました。

その後、龍護寺に参籠したのでありましたが、特に住職さん及び羽田道貫と申し、岐阜県（美濃の国）のご出身雲水時代は杖巻と名乗り、養賢寺の總持が十八年間お努められた、立派なお方でありました。龍護寺のご住職になられても無妻で、黙内はもとより、魚類、卵までも食べない精進家、観音様一途の方でありました。

当時お寺には、吉良せつさんという六十歳のおばあさんを炊事婦として雇っており、住職さんも六十余歳でありましたが、決して妻ではありませんでした。住職さんは八十歳でご他界なされました。

私が健康になり、おひまをいただいて帰るとき、住職さんは私に、「慈教院観念太光居士」の法名を下され、「お前は、観音様の子であるから、殺生を慎まなければ長生きはできない」といわれました。私日このご教訓を現在まで守り続けておりますが、気持ちのよいもので、寿命が伸びようが気が致します。

おかげで私はその後ずつと健康をつづけ、戦時中一時青山村役場の収入役ににつき出されて務めた外は、十五歳の時より先祖伝来の農業と山林業で、木炭製造や造林

伐採など、極めて重労働の連続でありました。

長い人生の間には、幸福ばかりはありません。妹が十七歳の春急性肺炎でなくなり、私の子供三人の皮、長男は生後百日足らずで亡くなり、次女は体格もよく至極健康体でありました。が、中学二年生の八月二十六日の晩、急に大熱を發し、医師の手当も看護も懸命に尽しました。が甲斐なく、一昼夜のうちで亡くなりました。

それから苦しい毎日がつづきました。その時は祖母や両親はすべりなく、親バカと云われるかも知れませんが、娘夫婦が、「亡くなった妹は可愛そうでならないが、いくら嘆いても仕方がない。お父さんやお母さんは、たとえ何もしなくても養い、後と見るものがあるから、よいではないか」と慰めてくれたのが心の支えとなりました。

私たちは、世の中には苦しい立場にある方々の多いことと覚悟することができ、益々仏教に接し、先祖供養のため、毎朝夕仏前にて、読経、感謝の念を捧げておりました。

八年前、妹の五十回忌、娘の十七回忌が同時に来たので、二人の写真を抱き、先祖供養のため、私は西国三十三番巡拝の旅も致しました。

最近私は、病気で休むようなことばかりなく、家業の手伝いに努めており、一昨年春日孫息子に嫁をもらい、ひ孫(男子)もできて、三夫婦揃って一家睦まじく暮らしております。

「思いごとが叶わねば、先祖供養をせよ。」ということがありすが、坊さんからお経をあげてもらうのは至極結構ですが、先ずそれより自家内満が、亡くなった方への一番供養になることと思ひます。

申すもまことに恐縮ですが、お互い近隣と助け合い、仲よく暮らすことが最大の幸福であり、ひいては明多い社会づくりに貢献することになることと思ひます。私も

昨年果から「明るい高年賞」をいただいた。友よました。これは、私の体験記であります。自分勝手な事ばかり書き、誠に恐縮に存じます。(おわり)

調査記録

血盆経塔

一佐伯地方に珍らしい三例

会員 五十川 千代 見

血盆経塔は経塚の一種で、普通「大衆妙法一字一石塔」が多い当地方で、今のところ三ヶ所しか発見されていません。今後これを契機に、幾らか見つかると思われます。皆さんからもご協力いただけたら幸いです。

血盆経とはいったいどんなお経でしょうか。辞典には次のように出ています。

血盆経 (昔橋藏次大藏和持決りよ内)

血盆経の一名 一各 女人血盆経 地藏本願経の飲血地獄をもとにして、中国で目連正

經血盆経を作り、我が国古代の禪僧が、又これを擬作して女人血盆経と名づけ、曹洞宗の戒会などに於て、之を女口と云えた。

これだけでなく血盆経の内容はわかりかねますし、またこの経文を一字一石塔に用いた趣旨もわかりません。とにかく血盆経の経文によって供養塔が営まれていることは、珍らしい事実ではないでしょうか。

佐伯地方(佐伯市・南海部郡)外にもまだあるのかと思われ、発見されればお知らせ下さい。